

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

《人社系》

●女子美術大学美術研究科芸術文化専攻

「表現空間創出による高度人材育成と職域開発」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

海外他大学や研究機関との協働プログラムは多数実施したが、それを契機として、大学間協定にまで発展させるには、手続的にも時間が不足していた。とりわけ、プログラム後半で新たに生まれた関係については難しく、現実的には交換授業などによる対応が考えられたが、特別授業や、講演、ディスカッション・イベントとしての実施にとどまった。

(苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

短期のプログラムと、継続的かつ有効意味な協定関係の構築を目的とする大学間協定との間に、直接的な成果を見いだすためには、プログラム実施前から、ある程度関係を熟成させておく必要がある。また、より柔軟に、特別講義や学外イベントを単位化するなどの環境も必要なのかもしれない。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

大学間協定にはいたらなかったものの、海外での特別講義の実施(韓国)、小規模ではあるが国際シンポジウムの実施(中国、韓国、日本)、国際協力プロジェクトの実施・運営(ポルトガル、ノルウェー、メキシコ、オーストラリア)を行い、将来的に大学間協定にも発展可能な関係は構築できたと思われる。このうち、オーストラリア(QCA)に関しては、プログラム実施前から大学間協定があり、そのさらなる充実の一助となったが、大学の資産でもある協定大学についての調査の充実が効果的であることを説明しており、より考慮すべき対応のひとつであると言えるだろう。

《理工農系》

●山梨大学医学工学総合教育部応用化学専攻、機能材料システム工学専攻

「国際燃料電池技術研究者の基礎実学融合教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリーを検討したが、プログラムの限られた期間で行うことは非常に困難である。

(苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

単位互換協定やダブル・ディグリーは大学内の規定や専攻の設置基準などを見直す必要

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

があり、短期間で対応することが難しい。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

単位互換などは困難であったが、国内外機関の教育研究者が特別講義やセミナーなどを通して実質的に指導する機会を設けることができたので、学生の資質の向上という点からは当初の目的を達成することに問題は生じなかった。

●岐阜大学連合獣医学研究科獣医学専攻

「グローバル化に向けた実践獣医学教育の推進」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

大学院の教育システムの改革が優先するあまり、国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等を進める時間的余裕が得られなかった。

(苦労したこと、困難であったこと具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

海外の大学との連携を図る意味で、国際シンポジウムや大学院生の海外研修等を盛んに実施したが、現在の大学院の履修システムと海外の履修システムの共有や融合を図る機会が得られなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

国際的にも通用する大学院の履修システムを確立することが重要である。履修システムを共有することによりお互いの利益が明確化するためにも、履修内容の改革と広報が重要であると思われた。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例《非公表プログラムの事例》

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

《非公表プログラムの事例》

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

●事例3

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

- ①大学間協定締結の交渉・締結、海外インターンシッププログラムの実施をすること。
- ②外国人研究生関連規則の改正、制度の構築を行うこと。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

- ①大学間協定締結の対象校は、教員個人のネットワークを頼っての交渉が殆どであり、世界的なランキングで高い順位のところほど、訪問・見学招待・詳細規定の摺合せに時間がかかった。
- ②海外インターンシップでは、まず、学生の内向き志向を修正するところから始めなければならず、オリエンテーションや説明会に時間をかけた。国内インターンシップについても、学生の理解が薄く、初めは教員サイドからの働きかけなどの手間が必要であった。
- ③文系では、博士課程の外国人研究留学生の例が殆どなく、制度制定・学則改正の前段階で、状況の理解を浸透させることに長い時間がかかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

- ①時間を惜しまず真摯に交渉したため、ほとんどの海外大学と協定締結あるいは進行中である。
- ②海外インターンシップや海外研修を正課にて実施した実績ができ、先輩から下級生への宣伝効果があり、一定数の参加者が期待できるようにはなった。
- ③何度も説明や説得を繰り返したおかげか、学内の制度規則の整備が進み、博士課程の研究留学生（外国人研究生）の高額な学費負担が無くなり、積極的な受入れができるようになった他、海外研修に赴く学生への渡航費等補助が研究科の意志でできるようになる等、国際化に向けた教育取組を行いやすい環境になりつつある。
- ④国内インターンシップについても、企業数を増やすことが難しかった。これは、ただ手間の問題であると考える。